
幻想旅行記

乾燥用

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想旅行記

【Nコード】

N11111N

【作者名】

乾燥用

【あらすじ】

適当に旅行へ行く話。

何かと内容、文章からして不足の面を感じるが、そこも適当に練習に書いていただけですな。

旅行前

—

金はある、暇も持て余すほどあるが、やることがない。やるべきことがない。

私の物事の秤はおおよそやるべきか否かという尺度で決まってくる。生きていればそれ以外の尺度で測るものの方が圧倒的に多いに拘わらず、こんな不便な尺度を用いる。しかし、こんな尺度でも生きてこれたことが未だに尺度を変えない理由である。しかし、一人で居れば、また複数で居ても、であろうが、これほど不便な生活もない。言ってみれば、五桁の計算を電卓が横にあるのに未だに筆算を使っているようなものだ。これほど不便で非合理的な話もない。

一人で居れば不自由さがたたる。二人で居れば、相手を気遣う。三人以上居れば周りの目を気にする。やるべきことでないこともやらなければならぬ。

ただ一人で自分の尺度を用いれば息苦しくはない。ただ手を周りに伸ばすことはできないが、それだけの話である。

しかし、やはり不便である。覚悟のおかげでその不便に耐えることは難しくはない。しかし、それでもその覚悟の耐えというものへ、々徐々に不便の水位が増して、最後には決壊することがある。年に一度、二度、そういつた時がくる。

そういつた時、何をすればいいかわからない。それは長い間、尺度によって一人で生きてきた私にとって、一人で出来ることなど少ないことを理解しているからだ。決壊したものを修復することなど一人で為せるものではない。為せる方法がやっても、平凡な私の頭では到底思いつくことなどない。

時は全ての傷を癒すと何かの本で読んだことがある。自分の経験からも全くその通りだと思いが、時で傷を癒すのには長い年月がか

かる。私にとって不便によって覚悟やら何やら、全てが崩壊した今が大事なのであって、傷が癒えるだろう、明日か、一週間後か、一カ月後か、はたまた一年後が大事なのではない。今である。

ここまで考えが至って、何をするにしてもたまらなくなつた私は、数少ない友人に会うことにした。この不満の解決策、何かの知恵を授かりたくなつた。それだけのことである。

二

私が先に書いたことを思い立つたのは秋のことだつた。夏は夏で暑くて不満がたまる。冬は冬で寒くて不満がたまる。春は春で眠気がたまって、為すべきことも為さずに、眠りに落ちて不満がたまる。秋は熱くもなく寒くもなく、暮らしやすく、考えることもまとまる。風景も良い。しかし、三つの季節を過ごして、溜まりに溜まつた窮屈が押し寄せて、何も為せなくなるのでは話にならない。自嘲すべきことだが、今や笑い飛ばすこともできないほど私は切迫していた。友人宅へ向かうには東へ電車やらバスやらを乗り継いで、繁華街を経由して、一時間ほどかかる場所にある。普段なら一人で暮らそうと心がけている私にとって、繁華街など雑多なところに行こうともしない。また一時間もかけてわざわざ出向こうなどとも考えない。だが、それほど切迫していたのである。

秋の静かな風が吹く中、電車に揺られながら考えた。友は私にどのような言葉をかけてくれるのだろうか。このような自分の形振りにさえ悩む人にまともな言葉をかけてくれるのだろうか。考えれば疑念しか生まれなかつた。一人で生きてきた私にとって、友人を友人と名づけるのも恥ずかしく、また友人をまともに直視することも恥ずかしかつた。

それでも知恵を授かるうと長い時間をかけて友人の下へ向かおうとしているのだから、また気を病んだ。

ぼつつとそのようなことを頭の中で巡らせていると電車は繁華街

についた。繁華街はいつもどおりきらびやかで、雑多で、自分の存在がより希薄になる嫌な場所である。自己を主張しなければ、到底生きていけそうな気はしない。自己主張するには他人と触れ合うという前提がある。その前提の問題をクリアすることも、また気が滅入る。

私は電車を降りて待ち人多い構内を、早足で駆け抜けていった。露出の激しい女性も、煙草を吹かして友達と大声を上げてしゃべりあう男性も、視線を捉われることなく一気に駆け抜けた。

そうして私はバスに乗った。あと十五分といったところで友人宅へつく。バスの乗客はまばらであった。その中で一つ目に付いた親子が居た。おそらく三十代ほどであろう母親と、学校にも通わないほどの年頃であろう幼児、そして赤ん坊がそこに居た。幼児と赤ん坊の性別は検討もつかない。髪型は長くもなく短くもなく、服装も男性とも女性とも取れる。

母親は多少疲れた顔をして、バス座席に座っている。ハンドバッグを膝元に置いて、ベビーカーに乗った赤ん坊を見つめている。疲れた顔をしているのは赤ん坊への気疲れだろう。

幼児は靴を脱いで座席の上へ立って外の風景を眺めながら母親に色々話をしている。私もあのような年頃があつたのだろうかと思いつつながら見つめていると、何やら幼児が喚き散らし始めた。幼児の喚く言葉の断片を拾っていくと、どうやら幼児は母親が赤ん坊の相手ばかりしていて、不満がたまつて喚き始めたようだ。母親が「ごめんね」などと幼児を慰めようと色々な言葉をかけているところでバスが友人宅の近くに到着した。

母親の言葉を背中では聞きながらバスを降りた。友人宅は私の住むところと同じぐらいに田舎である。森も多く、背の高い建築物もあまりない。しかし、若干私の住むところよりも南に位置しているからか、私のところでは聞かなくなった蝉か、蝸かの虫の音が鳴り響いていた。

虫の音を聞きながら、友人宅へ歩く。その道中で先ほどの幼児の

ことを思い出した。

幼児ほど純粋なものも中々ない。思ったことがあればすぐ泣き、すぐ笑い、すぐ誰かに訴える。延々と悩むことを繰り返す私よりも随分と高尚ではなからうか。もちろん、私のような大人の大人が、あの幼児のようでは困る話だろうが、考えようによっては、大人の大人が感情を純粹に伝えることが難しくなつた世の中に問題があるのかもしれない。こう考えると、ただ他人に責任を転嫁しているだけかもしれないと思う。私の悩みの種は尽きない。

そうこうしているうちに友人宅へついた。友人宅が住む戸建へ来るのは随分と久しぶりだが、相変わらずの佇まいであった。なんとも歴史を感じさせる木の門と正面右脇に見える柿の木。柿は緑の実を結び、膨らみ、かすかに橙の色をつけようとしていた。

三

書くに当たつて友人のことをSと呼ぼう。Sとは大学の時に知り合つて以来、時々会い、先ほど通つた繁華街で酒を酌み交わすこともある友人だ。大学に居た頃から今まで色々話をした。女、金、勉強、将来、そして愚痴。腹を割つて様々な話をしたはずだが、今の私にはそれらの過去が友人であることの保障として意味を全く成していなかった。過去が保証の意味を成さないほど人間不信が限界に達していた。

Sの住む家にはSしか住んで居ない。Sの父は大学在学中に亡くなった。その葬儀にも付き合つた。Sの母は高齢で体の不自由のためか介護施設に預けてあるとのことだった。そのため、広い戸建にSは一人で暮らしている。女は居るようだが、まだ結婚はしていないようで、そのことがよく酒の席で話に挙がる。

玄関で出迎えてくれたSもこの家と同様に変わった様子は無かつた。年がら年中変わつていても困りものだが、この不変の男を見れば、自分が今の今まで変わらず生きていることが不思議と自然に思

えてくる。大学を卒業して十年ほど経つだろうか。中年となりつつある私が、この十年間何ら変わりなくこの男と交友を交わしていることへの疑念が消え去らしてくれる。

「大学以来この家に来るのも久しぶりだろう、まあ上げれ」

「それじゃ、失礼」

他愛もない、気軽に交わす言葉でも、心から染み出てくるものがある。

通された部屋はSの自室ではなく、Sの両親が存命だったところにSの両親がよく座って作業をしていた和室だった。和室はすっきりとしたもので、物らしい物は何一つなかった。仏壇が一つあるだけだった。これほど和室がすっきりしているのは、この部屋の主とも言えるSの両親がいないせいだろうか、とふと頭によぎった。Sの家に着いたのは四時過ぎで、日当たりのよい和室はちょうど西日が差し込んでいた。よくよく見れば、畳が大分日に焼けて元の緑の色から黄色へと変色していた。

「座布団はいるか？ いらんだろう？」

少し畳の目でも見ていると、Sは口早で私に問いかける。答える間もなく決め付けられるが、そんなことに頓着なく私は、大丈夫、構わない、などと言って座敷に腰をかけた。

「茶ぐらいは出すよ。少し、待ってる」

と言ってSは台所に向かった。茶を待つ間やることがなくて、少し周りを見渡す。一人暮らしのせいなのか和室の向かいに見える洋式のリビングは衣服や新聞、雑誌などで少し散らかっていた。窓から見える景色は手入れの全くされていない木々が見える。雑草も目立つ。蜘蛛の糸が西日に反射して目に入る。

何となく寂しい気がした。S以外にここに誰か人が住んでいれば、少しは家の見栄えがよくなるのだろうか。人の息吹を感じる家になるのだろうか。

「茶がなくて、コーヒーしかなかった。まあ、こっちの方がお前の好みだろうし、いいだろう？」

カップを盆に乗せてSが和室にやってきた。

「ああ、大丈夫だ」

と私が言うと、カップを机に置きながらSはぼやくように言う。

「しかし、珍しいこともあるもんだ。お前がわざわざ家にやってくるとはなあ。何かあったのか、ただこつちに来たいと言っただけで、用事も何も聞いていないしな」

私は、うん、まあなど言葉を濁しながらカップをジッと見つめた。どう切り出したものだろうかと考えた。単刀直入に自分の思っていることを切り出しても上手くは行かない気がした。だけれども話さなければならぬ。どういう形であれ、納得できるものを引き出さなければ、何をしにきたのかもわからない。

一、二分カップを見つめていただろうか。如何にして引き出すかはわかったものではないが、呟くように私は話を切り出し始めた。

「もう一人暮らしになって何年ほど経つ？」

「俺の母ちゃんが施設に行ってもう二、三年といったところかな」
「どおりで随分家がひどい様なわけだ」と、散らかったりリビングへ顎をしゃくった。Sは笑いながら、

「お前の家にも数年行ってないが、似たようなものだろう」と切り替えてきた。

「何、お前の家ほどじゃないさ。しかし、アパートかマンションにでも引越した方がいいんじゃないか？ お前が住むには広すぎるだろう」

「そうも思うが、自分か生まれてからずっと住んできた家を自分の都合だけで売り払う気にも中々ならないよ。売る手続きが面倒っていうのもあるけどな」とSは仏壇を見ながらそう言った。

「だったら早く女と一緒に暮らすんだな。まだ彼女と籍も入れてないんだろ？」

「まあな。それにしたって自分の都合と相手の都合つてもんがあるから中々なあ……」と今度は宙を見つめて考え深げな顔をする。

「まあ、俺の話はいいんだ。で、お前はどうしたんだよ」とSは身

を乗り出して聞いてきた。

「それは……まあ、暇なのさ。早い話が」

「間違いないな。出不精のお前が来るんだからそうなんだろう」とまたSは笑い出す。

「何か暇つぶしになりそうなもんでもないか？ それさえあればお前の家に来やしない」と、私は軽口で返す。

「失礼な話だな。茶も出してやってるのに」

「茶じゃないだろ、こりゃコーヒーだ」と私はカップに手をつける。「それでも飲むなら筋は通ってるさ。まあいい、暇つぶしねえ……いい年こいて遊ぶもの借りに来たってわけでもないんだろ？」

「暇つぶしになる物だったらどこかの店に行っても買っさ」

「うーん、と唸りながらSは宙に目を向けて少し考えた。次に私の顔をジツと見つめた。私の後ろに憑いた何かを見透かすようだった。相手の状況、心理、これらを見透かすのがSは非常に上手い。そしてSのかける言葉は非常に的を得るものが多い。だからSには私と比較にならないくらい友達が多く、社交的で誰からも愛されやすい。社会に出た今でも、私以外の友人からSはよく飲み誘われる。こういう性格のSだからこそ私は、彼の家に来た。だからこそ今でも私は時々彼と飲みに行こうとするのだろう。」

「どこかに旅にでも出ればいい。この前南にある温泉街に社員旅行ってやつで行ったけど、悪くなかったな」

「思いついたようにSは言った。その言葉を聞いて、一分ほどその言葉を様々な方面に咀嚼して考えて言った。」

「しかし、俺は一人だけ。お前みたいに給料もらって会社で生活しているわけじゃないから、社員旅行で行くのはわけが違う」

「別に誰かといって騒いで過ごすだけが旅じゃないだろう。観光名所でも見て回って一週間ほど外で過ごせば立派な旅さ。そんなもんだろう」とすぐに言葉を返してきた。Sは私がこのような反論を返すことを予想していたのだろう。」

「そうだな、と呟きながら私は少し旅というものに色々頭を巡らし

た。別に金も時間もそれなりに持て余しているものだから、問題らしい問題などないのだが、どうもすんなり旅行へ行こうという気にならない。自分は旅行、加えて言えば観光というものにそれほど興味はなかった。古城を見ても、何かのモニュメントを見ても、それらしい感動を覚える気が全くしなかった。

私ができるようなことを考えているとSはまた見透かしたのか、「まあ、行くか行かないかはお前の自由さ。しかし、もう俺は提案したからよ、これ以上はないぜ」と言い放った。

そうだなあ、などと濁しながら、それから世間話が延々と続いた。Sとの話が終えて、感謝の言葉を述べてSの家を出た。

そして旅行について色々と考えながら帰路を歩んだ。結局のところ、選択肢が自分で他に思いつかないので、どこかに旅に出ようと決心した。やはり、それだけのことであった。

旅行前（後書き）

特に最後がもうちょっと書き足すべきだと思ったが、面倒くさくな
った。

旅行前夜

四

こうしてSの家から帰って、我が家に着いてから改めて様々なことを考えた。どこに行くかも、決めねばならない。如何に旅行を通して、自分の耐えの決壊という傷を癒すかも考えねばならない。そして、果たして本当に旅行に行くことで自分の気が晴れるかを考えねばならない。

そのように考えるのは、やはり自分の性であろうか。やるべきか否か、その尺度でこの場面でも測っているからである。別に旅行に行き、宿に泊まり、美味しいものを食い、珍しいものを見て、結果体を癒し、療養をするためではない。言うなれば、これは奇貨を探す旅なのだから。目から鱗が零れ落ちる、その鱗を拾いに行く旅だ。体ではなく気持ちを晴らすということはそれに他ならない。

Sと分かれる間際、行きの時に使ったバス停までSが甲斐甲斐しく見送ってくれた時に、最後にSはこう言った。

「何をやっても暇な時は暇なもんだから、ぶらぶら気が向くままにどっか行ったりして気分でも転換して、また普段の生活に戻ればいいさ。何、難しいことじゃない、そんなもんだろっ」

万年床の布団の上で寝転がってその言葉だけが自分の横に横たわっている。左手を伸ばして、その言葉だけが拾える。右手を伸ばしても、空手だったのだから、拾うより他はない。

今もそうだし、Sの家に行った時もそうだし、今までもそうだし、自分を変えて何かを為すことが出来ないのならば拾うより他ない。金はあるが、心の面で言えば落ちているものを拾うより他ない人生だ、そこらの乞食と一つも変わらない。乞食が自分を変えて職に就かねば乞食のままなことで、原理は何一つ変わらない。

ただ理由が欲しかった。紙くずを拾う乞食はいない。旅行に行く

ということが、紙くずであれば誰も拾いはしない。

しかし、考えてみれば奇貨というものは札束のようにわかりやすい「得」であるのだろうか。今まで聞いたことのある昔話を紐解けば、奇貨とは大抵役になど立たない紙くずだ。拾う人が拾って奇貨とそれを名づける。

一ヶ月ほど前に仕事中、片手間で読んだ本にもこうあった。

「元来物に価値などないのです。金にもダイヤにも本来価値などありません。ただ輝くだけなのです。ただ美しいだけなのです。腹も膨れません。それを持っていて幸福が訪れるということもありません。昔山奥にある国で塩があまりにもとれないものだから、金よりも塩の方が価値があったという話もあります。」

そして、それは物ではなく人だとしてもそうでしょう。天才と言われ、世の中でよく知られている人でもそうです。美しい絵が描ける人、素晴らしい建造物が作れる人、物理だか、化学だかに秀でた人が新しい物を発明できること。これらに価値などそもそもないのです。ただの人がこれらの素晴らしい技を持つ人を見ても、何も感じません。もしかすると、これら素晴らしい技を持った人々同士でさえ、相手の価値を見出せないかもしれません。

価値を見出した時とは別の第三者が賞賛の声を上げて、その声が世間に浸透してからなのです。大抵はその道の大家であったり、権力者であったりしますが、そういった物や人に惜しみない賞賛と、重宝したがることから始まるのです。」

その書物の言葉と今の自分を重ね合わせてようやく一つの道が開けた。旅に出よう、そして、自分だけが惜しみない賞賛を与えられる物や人を見出そう、と。

そして、拾わねばならないから拾うという必然ではなく、拾って自分が信じるだけの価値がある壁を誰よりも愛して磨こうとする意気込みがあった。

旅行出発の日はSの家に訪問してから、一週間後になった。会社勤めでない自分がいくら暇だと言っても、まとまった休日を取ろうとなるとそれ相応に、自分の日常を前倒しにして詰めなければならぬから、随分意気込んだ日から遅くなった。

旅行先は東の繁華街方面ではなく、西の更に自分の住むところよりも田舎の方面に決めた。奇貨が雑多な方面に落ちている気が全くなかったからだ。少なくとも人工物である気はしなかった。誰しもが見向きする場所に落ちている物など高が知れている、そう考えた。

旅行前日の夜、身支度を整えた。服装は軽装で、海外旅行にいくような大型の鞆などは持たず、小さな鞆一つ背負ってそこにいくらかの下着、財布、洗面用具、そして地図だけを詰め込んだ。

変に意気込めば意気込むほど奇貨は遠ざかる。研究家でも探検家でもなく、冒険家の心構えだけが必要に思われた。探すのではなく、拾う。見つけるのではなく、見出す。私はその心構えは冒険家ではなからうかと考えた。

そして平常心で立ち回り、何に対しても好奇心を持つ、そして拾い、見出す。行く先など考えず、気になったときに気になっただけ触り、放り投げたい時に放り投げればいい。冒険家とは後先など考えず自由にぼんやりとしたもので動けばよいのではなからうか。

そう考えながら布団に入り、寝た。随分と落ち着いた眠りだった。窓の外は明日出発なものにも拘わらず、凄まじい暴風で、外にある木々が揺れに揺れて葉の擦れで気が散りそうなものだったが、すんなり眠りに着いた。目的が決まり、心がここに在れば、何事にも動かないものなのだなと感心しながらすやすやと眠った。

旅行前夜（後書き）

まだまだ面白いであろう場面にはたどり着きそうにない。

旅行初日（一）

六

午前十時。随分と遅い目覚めだった。昨日の暴風は収まっていた。平穩そのものであった。自分の部屋から見える空は薄い雲がいくつか点々と在るだけで、秋晴れと言言葉が当てはまる。私は風呂に入つて念入りに体の垢を擦り落とした。その行為は身を清めると言つても良かった。今まで身についた俗世の毒というものをまず落とすたかつた。そして、新しい体で、世にある全てを会得しようとする赤ん坊のような体で、旅行先にあるもの全てを知覚して取り入れたかつた。その表れであつた。

昨夜用意していた服に着替えて、小さな鞆を背負い、家を出た。家を出て、駅に向かう。道中はいつも通り平凡な風景であつた。家がある。犬の散歩で歩く人が居る。家先の植物に水をやる人が居る。車が通る。自転車も通る。

それを見ながら考えた。旅行先でも今のような風景がある。そういった日常がある。旅行とは別空間に行くことだ。しかし、町が違つても、国が違つても、星が違つても不変の日常は一定で存在する。そうすると私は旅行に行くべきなのだろうか。もしかすると今ある日常を、ある定点で見つめ続けているために、奇貨に気づいていないだけなのかもしれない。そういうことも考えさせられる。

眠気が何となく残っているからだろうか、昨夜の決意もぶれにぶれる。正確にはぶれ、と言うよりも、一つの事項に様々な要因が組み合い、重なり、絡み合い、失敗した綾取りのようになっていく。右からその糸を引っ張れば、解ける心配がない。そこで左からまた引っ張ると、これも上手くはいかない。そう右往左往して行くうちに、結局打つ遣るしかなくなる。そういう地点に辿り着く。これが自分が抱える致命的な悪癖であつた。

考えながら歩いているうちに駅に着いた。西の更に田舎の方へ向かう電車は時刻表を見る限り、一服していれば来るという時間というわけでもなかった。駅のホームでぼんやり考え事でもするのも良いが、常日頃から色々思考に努めている私が、これ以上思考を積み重ねるのも徒労に思われて、ふらふらと駅前の小さな、小さな商店街へ足を向けた。

時間が昼前だったせいか、商店街では昼飯前の買い物に精を出す主婦が多く見られた。威勢の良い八百屋やら、魚屋やらの怒号にも似た客引きを横目で見ながら、私はゆつくりと商店街を闊歩する。そうして歩いて行くと、小さな本屋があった。この本屋は昔は何かの週刊誌をよく買いに来た覚えがあるが、今では品揃えの良い東の繁華街にある巨大な本屋に向かうため、ここ数年は縁遠い物になっていた。

旅行で電車などの交通手段に乗る際に見かける小さな商店に、よく十冊ほど歴史小説や推理小説が置いてある。それをぼんやり読みながら目的地まで時間を潰すというのはよくある光景だ。今の私にはちょうどいいかもしれない、そういう軽い気持ちで小さな本屋に入った。

中には小さな店内に合わせたかのような、これまた小さな老人が店員として居座っていた。昔よく来たはずなのに、今一つ昔から居たという気がしない。実際、彼を見ていないのかもしれない。

店内には古くからよく読まれる文豪の本や、学術書がほとんどで、漫画など色合い鮮やかな本は申し訳程度に置いてあり、本屋というよりも、昔から町にある古本屋、もしくは古書店といった風情がある。昼前だというのに店内は薄暗く、壁面や天井は日に焼け、橙に近い色が見える。蛍光灯も、白い輝き、というよりも、足元が見えればよいと言わんばかりに埃に薄っすらと塗れた汚らしい灰色の色を放っていた。

何はともあれ、本を買う。旅行時に読むような目ぼしいものが思いつかないし、見当たらない、かといって歴史小説や推理小説のよ

うな、頭を小説の世界に潜り込ませる形式のものを買うのでは、旅行もおざなりになる気がしたので、新書のような少しは旅行の役にも立ちそうな本を三冊買って店を後にした。

老人はか細い声でありがとうございましたと言う。覇気はない。何とも自分の先行きが不安になる声だった。

七

本を買って駅に戻ると、丁度電車が到着する頃合だった。切符を買うのだが、目的地はないために、どこの切符を買うべきかを考えなくてはならなくなった。とりあえず電車で三十分ほど西にある古都の一つであるN市の中心地に向かうことに決めた。N市の北には海があり、南には山がある。更に西に向かうと、東の繁華街に一つ二つ劣るような街にも出る。どこに行くかはわからないが、先を考えるには丁度良い場所に思えた。

N市までの切符を買い、電車に乗る。屋外が特別暑いというわけでもないが、商店街で薄っすら蒸れた肌に、車内の涼しい空気が触れて、少しヒヤリとする。車内は閑散としている。通路の真ん中に立って、前後の車両、そして更に奥にある運転席まで覗く。合わせ鏡のように車両が連なって見える広がりを持った同じ光景は、人が居ないせいか一層合わせ鏡のように見える。

座席に座りながら、子供の頃小学校のトイレが合わせ鏡だったことを思い出した。必死にその奥にあるものを見出そうとしても、極限に奥行きを持った光景は、最後には人間に知覚出来ない奥行きを持って姿を消す。ここまで考えて思考が止まる。もう既に隣の駅を過ぎていて、更に電車は進んでいた。乗客はやはり居ないようであった。

電車の窓から見える外の風景は田園地帯である。田園の上、空中に小さな影がところどころ浮いて見える。蜻蛉であろうか。私自身、家から出ることが少なく、自宅の近所も田園だらけの絵に描いた田

舎というよりも、戸建の家々が続く都市圏に向かうために作られた
地方都市といった景色だからか、この蜻蛉を見たときに、秋らしい
秋を感じた。この時私は今日初めての独り言を呟いた。ああ、秋か、
と。

言葉で秋と言う文字を思い出し、綴り、読んでも、どうにも安っ
ぱい。落葉を踏み散らした音、秋の生き物を目視し、薄っすらとし
た肌寒さを感じてようやく、秋という空間に身を置いている気がし
た。そうしてようやく思い出した。秋と言うものはもの寂しい季節
だということ。

旅行初日(一) (後書き)

どんどん内容のパワーが落ちていく気がする。

最近自戒したことが1つ。

褒めるのは容易い、貶すのは更に容易い。

しかし、内容を伴わなければ、二つともその意味を為さない。

今の自分の生活はこういう悔い、改めることばかりの生活だ。

自分はずぐ調子に乗りがちだ。

最近の配信のコメントは自分は結構調子にのってるんじゃないかとよく思う。

拝見、拝聴して、コメントして、配信終わって、若干後悔する。

でもなるようにしかならないのだから、その場の悔いは次の日にはとんでもなく希釈される。

そして、今小説らしいものを書いているのは限りなく自戒に近い意味を持っている気がする。

見せたいのではなく見たいという気がする。

後書きが全く内容と関係のない日記みたいになったなあ。

こういう使い方もいいか。

旅行初日(二)

八

人と触れ合っていないからこんな想いをするのだろうか、そして今、旅に出ているのだろうか、奇貨とは人だったのだろうか、私はこう考えた。しかし、人の世は住みにくい。それを感じたからこそまでやってきたのだ、今更変えようがない、それはこの旅も同様だと思った。

気分を変えるために買った本を見た。一冊目は人生教本のような内容で、見ても全く心に響かず、パラパラと斜め読みでページをめくり、十分もたたずして読み終わった。ここまで行き着いた自分にこの本がどんな意味をもたらしてくれるのかわからなかった。この本で知ることを実行すれば、今までの人生よりかはもしかすると楽になるかもしれない。しかし、良いことばかりではない。悪いことも必ず起こる。今の人生と新たに作られる人生を天秤にかけて、新しい人生の方が重みがあったとしても、享受できるだけの力は今や自分にはなかった。

二冊目に手にした本は様々な思想家たちの思想を編集した哲学総論のような本だった。過去の歴史と知恵を様々な角度で描かれたこの本は中々面白い。少なくとも一冊目の人生教本のような強弁はなかった。一つの知識として目の前に提示する謙虚さがそこにはある。それが何よりもありがたかった。

一人目の思想家の言葉にはこうあった。
「専門家は専門外のことになると俗衆になる。そして俗衆同士がこの世の中を構成し、俗衆たちが他のものよりも秀でた鋭利な部分を切り売りする。こうして利潤に満ちた社会が制度と化してしまえば、そこに本来あった純粹さは霧散し、代わりに利潤だけがそこに残る」
そして、続く言葉が、「だとするならば社会組織に勝るものはな

い」とだけあった。

陳腐化した純粹さは組織によって駆逐される……と私は呟き、目線を本から外して頭を上げた。車外を見ると海が見えてきた。自分の居る車両には人がないので、遠慮せずに電車の窓を開く。強風が車内に流れ込み、幽かに潮の匂いがした。夏はまだ生きていた。

雲少ない晴天の下、波多い青海の上、白い海鳥が群れて空を舞う。電車と追越し、追いつきながら並行に海鳥と電車が進む。

あれはカモメだろうか、ウミネコであろうか、あるいは他の海鳥であろうか。五分ほど電車と海鳥がじゃれあって、そのうち海岸線はゆるやかに視界の奥に逃げて行き、海鳥も海岸線に沿って奥に消える。

海の青と海鳥の白が消えて、海の匂いも消えて、今度は山の緑と木の匂いが少しずつ現れ始め、虫の音も現れる。

あの海鳥は電車から逃げたのだろうか、海岸線を追って行ったのだろうか、単に気まぐれで海岸線へ沿って行ったのだろうか、そして海鳥は海でしか生きられないのだろうか……

私は消えた海岸線の方角を見る。しかし、山、木々だけが眼前にある。海は一つも見えなかった。

すると車内に車掌の声が響き始めた。まもなく駅に着くようだ。目的のN市までは山をあと二つほど越えなければならず、あと四駅ほど先にある。だが電車を降りたくなった。あの消えた海鳥追ってどこに消えたか知りたくなった。

読んでいた本を鞆の中に放り込む。車内の窓から駅のホームが見えてきた。電車を待つものは一人も居なかった。

九

降りた駅は無人駅だった。一度も降りたことのない駅で、ここ数年は西方面に向かったこともないので、仁王立ちした田舎駅のホームは新鮮だった。

辺りは一面木々に覆われていて、駅前にかの家の一つも見当たらない。駅のホームどころか駅周辺にも人の気配がなかった。誰も居ないおかげで切符をわざわざ改めて買う必要がない状況だったが、生真面目に最初に買った切符を切符入れに放り込んだ。

いざ、駅の外に出てみるとあの海岸線へ向かう道がどちらになるのかよくわからない。わからなくなるほど、木々が茂っている。駅の前には普通一つぐらい周辺の地図が載った看板があるものだが、それさえも見当たらないので、出かける時に持ってきた地図を鞆から出して、それを片手に海岸線方面らしい方向へと私は歩き始めた。何の木かはわからないが、針葉樹林のような木が辺りいっぱい広がっている。幼少の頃に見た、迷子になった兄弟が歩き回って妖怪の住む家に迷い込む童話、その舞台である森を思わせるほどの奥行きが視界全体に広がる。森から聞こえる夏の虫の音が煩わしいほどに響く。そして道路だけが不気味に海岸線であるう方面へと導いている。

だが、この道が本当に正しいのかはわからない。五里霧中の心境、しかし行かねば、正しいのか誤っているのかさえわからない現実が、私の足を一歩一歩進めさせた。

十分ほど無心に歩くと開けた小高い丘に出た。丘の下には海があり、漁村が点々と広がっていた。安堵の一息をつく。道は右に折れ、坂が漁村へと続き、正面には坂を貫く階段がある。安堵の一息が思わず、階段に腰を下ろさせた。

眼下にある風景に、もう海鳥は空を舞ってはいなかった。少し歩いただけなのに、汗が額に滲む。何をしに、私はここまで歩いたのだろうか、そういう気にさえなった。一息ついていると、今度は喉の渴きが押し寄せる、空腹が押し寄せる。嫌に陳腐なものだけが自分には残る。漁村に行けば軽食を売る店の一つや二つあるのかもしれない。仕方なく私は立ち上がり、階段を下っていった。

綺麗事を追いかけて続けたらどれだけ素晴らしいことか、とも思う。しかし、霞を食って生きていけるほど現実には美しくはない。それも

知っている。しかし、綺麗事は綺麗だからこそ追って行くだけの価値があることも知っている。不自由さだけが身に染みる。そう考えながら、階段を下りていく。階段を下りて丁度半ばに差し掛かったとき、私はふと後ろを振り返った。見上げた所には、階段と森。あとで階段を降りたことを後悔しそうな光景だった。

旅行初日(二) (後書き)

色々と自分の影響したものが反映されてこの文章が構成されているように思う。

内容的には随分違いがあるように思われるが。コンセプトというか、説明しがたいが、自分のイメージしている今回の作品は漱石の『草枕』のように思う。

あそこまで格調高くは書けないあたりがまた力量なのかも思う。また、途中で間テクストをよく利用しているが、そこで主に参考になっている文献は『日本の名著 近代の思想』(桑原武夫編 中公新書)になる。

『世界の名著』というシリーズ化されたもう一つの本も読んではいませんが、どうも『日本の名著』の方が肌に合った。中々面白い本だと思う。

旅行初日（三）

十

階段を降りた先は国道だった。車の往来は少ない。通る車もトラツクだけが風を切る。国道を挟んで向かいが漁村に当たる。

時計は持っていない、持っては居ないが陽の高さからして少し昼を過ぎていると思われた。陽は高いが海に近いせいか、心地よい風が吹いて暑さは気にならない。

国道を渡り漁村を歩く。車も通れないような狭い路地を歩く。路地に続く路地で真つ直ぐ続く一本道というものがほとんどない。迷路のようにも思われる。出口はわからないので、行き当たりばったりでとにかく進む。

漁村というものは昔から存在するコミュニティーであるから、家並みは総じて古い。継ぎ接ぎの様に木材や金属片を無理やりくっ付けた家もある。そうしたものは大抵海風によって、錆びて金属部分だけが錆びて廃墟の趣きを醸し出す。

民家の門前では魚の干し物が並べられ、ホースの水を出しっぱなしで桶に水を溜めている。桶から水が溢れ出し、辺り一面は水浸しであった。

そんな絵が何軒も連ねている。人はここでも何故か見かけなかった。もしかすると早朝に人々は漁に出て、今のような陽が高い時間は暑さで体力が奪われやすいものだから、家で昼寝でもしているのかもしれない。

このような漁村では猫の一匹でも往来を歩いて、魚を掠め取る絵でもありそうなものだが、猫は見かけなかった。

こうしてぶらぶら歩いていると港にまで行き着いた。港にもやはり人は居なかった。水面が陽で反射してキラキラと光る。小型の舟がいくつも見られる。それだけだった。人も猫も、生物と言われる

ものは一つも見かけなかった。

私は何かあると思ってここまで来た。最初は海鳥がいると信じてここまで来た。そして、やはり、というべきだろうか、心のどこかで人が居るものと信じてここまで来た。しかし、誰一人居ない。

じわじわと孤独が押し寄せてくる。孤独に引き摺られてどこまでも落ちていく感覚がある。

今まで孤独な方面へ進んできた。そして今も孤独な方面へ進んでいる。そうすれば今の状況　自分しかない漁村　は必然に起こるはずで、今の状況を受け入れられる覚悟があるはずだった、にも拘らず孤独に感じた。

私はどこまで進んでもその辺りにいる人と大して違いがないことを悟った。それは私自身に対する失望の始まりでもある。

自分の知恵は平凡であることは自認するところで、自己の特筆すべきところも思い浮かばない。しかし、我が道だけを歩き続けた自分だ。何かしら自分にしかないものがあると信じてきたものだが、ここにきて改めて自分の空虚さを知った。

自分の中には核のようなものがあって、それによって自分は生かされているという感覚があった。だが、今、己を振り返れば自分の核というものは、隣人の持つ核と何ら変わりがなく、いくらでも代わりが利く消耗品と言っても過言ではなかった。

私は「生かされている」という意識がなければ到底生きてはいけないような人間だ。自分の足で立っているように見えても、実際は寄りかかって生きている。誰かによつてではなく、自分を客観的に鑑みて、自分が自分を肯定し、それを原動力として生きているに過ぎない人間だ。そう考えると、私が今感じている失望、それは大きかった。

海、穏やかに水面が波を立て、永遠にその波が途切れることはない。

腹が減ったことも、喉の渇きも忘れて、港の岸壁に腰をかけて水面を見つめた。一步も動くことなくただただ見つめる。水面を見つめることに意味があるのではなかった。失望の大きさが私をそうさせた。思考をするということでもなく、風景を楽しむということでもなかった。岸壁に小さな波がぶつかり、水しぶきを立てて、寄せては返す、その光景を見るだけであった。

どれだけの時間が経ったことだろうか。いきなり背後から「お兄さん」という声が聞こえた。私が後ろを振り向くと初老の男性が立っていた。漁業を生業としている人であろう初老の男性は、陽に焼けて過ぎて肌が黒く、被っている帽子もまた陽に焼けて色褪せていた。頭を掻きながら、申し訳なさそうに老人は私に言った。

「ちよつと船を出そうと思ってるんでね、そこに居られると危ないからちよつと立ってもらえないかい？」

口角を上げて、微笑をつくり、目を細め、謝意を表し、顔に深く刻まれた皺は、彼の漁師としての時間の長さ、そしてその蓄積された疲労を感じ取れる。

すみません、と軽く謝りながら私は腰を上げた。

「お兄さん、こちら辺じゃ見ないね、旅行者か何かかい？」

「ええ、私はもう少し東に住んでまして……」

「やっぱりそうだろう。ここも狭い町だからね、住んでいる人の顔は大体わかるよ。しかし、お兄さん、こんな見るところもない町によく来たなあ。何か面白いものでもあったかい？」

私は言葉に詰まった。言葉が出てこず、相槌を打ってぼんやりしている、老人は懐から煙草を取り出して吸い始めた。船を出すとは言ってきたが、船を出そうとする様子もない。話好きなのかもしれない。

「まあ、ないよなあ。わしも十六からずっと漁師やってここで暮らしてると、別に面白いもの何てないなあ。うん、ないなあ」

吐いた言葉をまた飲み込むように呟く。それを聞きながらつい言

葉が突いて出た。

「何でないのです?」

老人はジッと私の顔を見た。

「お兄さん、面白いこと言うな。ないものはないんだ。あるからある、ないからない」

老人は節をつけて禅問答みたいなのを言い始めた。

「わしが魚捕ってるのも同じだ。これだけ長い間魚ばかり捕ってたら詰まらん。詰まらんが捕らなきゃ食っていけん」

全く持つてどこがどう同じなのか意味がわからなくなって、また相槌を打つと、

「暮らせども、暮らせども……ってな、まあお兄さん随分長いこと暗い顔しとるからな、海にでも落ちて死ぬ気じゃないかと思うとっただわ」

ハツとした。そういう風に見られていたのかという気持ちになった。老人の言葉は私を焦燥に駆り立てた。こうしてはいけな。そこで私の腹がぐうと鳴った。

「お兄さん、腹が減ったんか。あははは。そりゃあ元気も出らんわ。何かの縁やから、うちにでも来て飯でも食わせてやりたいところだけれども、うちに今、うちのかあちゃんがおらんからな……」

と、いよいよ老人の勢いが増してきた。でもどこか優しい含みを持った勢いだった。

「お兄さん金ぐらい持つとるよな?」

ええ、と私が答えると、

「この道真っ直ぐ行くとな、一元っていう食べ物売ってる店があるんだわ、そこで簡単な焼き魚とか飯も食わせてくれるから、そこに行つて飯でも食いな。そしたら元気も出るわ」

はっはっはと豪快に笑いながら老人は船が並ぶ方へ去つていった。心地よい方だった。

旅行初日(三)(後書き)

久しぶりにこの作品ページ開いたら二ヶ月更新してませんと出た。
大きなお世話だ。

書けば書くほど統一感がでないが、まあいいかと思っている次第。

旅行初日（四）

十二

足元の地面を見て物を考え、前を見て人を探し、天を仰いで先のことを考える。

省みるのは難しいことだ、としみじみ思った。昨晚誓ったはずだった。何かを見つけてみせると、何かを信じてみせると。しかし、現実には半日も立たないうちに心が折れかかっていた。情けなさが回りに回って、呆れ返ってしまうほどだった。

ここで一つ力んでいたものがいい具合に抜けた。幾分か楽観的になった。悩んでどうするというのが、誰に慰めてもらうというのが、そう考えた。ああ、自分の足で立とうと考えた。誰に支えられようとも、自分が歩こうと思わねば、前には進まないのだからとも考えた。また自分が一步も動かないのなら、動かないという意志が働いているとも考えた。自分は自由自在だと、そう思えば苦になることは何一つなかった。

天を仰ぎながら、随分と先ほどの老人と話した場所から歩いたことを考えた。既に五分、十分は過ぎたはずだった。老人の言うことだから近いだの遠いだの言ったところで大して当てにはならないもんだなあと思った。既に往く道は漁村を外れて田んぼがちらほら見える場所である。

そうすると一本杉とでも言えはいいのか、巨大な大木が見えてきた。あれは……と思いつながら歩を進めると、先ほど漁村へ行くために越えた幹線道路にぶつかって、道路を挟んで向かいに巨木が現れた。その一軒挟んで隣に白い看板で「一元」と書かれた建物が建っていた。

はて、と思った。駅から森を抜けてあの長い階段を降りた、その時にこんな馬鹿でかい大木なぞあったか？ と思ったからだ。三階

建ての建物ぐらゐの高さがある大木なのだから普通気づくはずだけれども、覚えが無い。

うーんと顎に手を当てて頭を捻ったが腹が減っていることも相成つて、疑問もほどほどに店へ向かった。

店は一言で言えば古ぼけていた。地震でもあれば倒壊しそうなほど古ぼけていた。見た目は木造であるし、ガラスはすりガラスであったし、自分が住むところにもこんな家は見たことは無かった。もしかすると雨戸も木で作られているのではなからうかと思うような外観である。先ほど歩いた漁村の中にもこれほどの建物はなかったように思う。

先ほど話したあの老人には悪いけれども、この店は避けた方が無難ではないかとも思った。しかし、他に店がないようであるし、そんなことで文句を言うのも旅行として無粋のような気がする。旨ければ旨くても良い。不味ければ不味くても思い出しには残る。そう思えば入ることも苦ではない。そう思つて歩を進めた。

店先には小銭を入れてオモチャを出す機械が五台ほど並んでいる。娯楽などこんな漁村ではほぼ皆無に等しいであろうから、こんなオモチャを置いているのだろう。

その機械の前に女の子が座つてその機械を見つめていた。真剣とも言えず、かといつて気の抜けたといつたほどでもない、その眼力は透視をするかのようなだった。訝しげな、と言う表現が一番近かった。機械を見つめることに集中しているか手が届くところまで近づいても、少女はこちらに気付く気配がなかった。

年は十台前半といったところであろうか。髪は少し長い。白のワンピースを着て、しゃがんでいる。そのせいか裾が少し土で汚れていた。

私は少しばかり、とはいつてもほんの数秒であつたが少女を見ていた。これぐらいの年頃だったら、あんな安物のオモチャにそれほど興味を抱くこともなさそうなものだが、と思った。そんな興味で少しばかり少女を見つめていた。

そして、店に入ろうと扉に手をかけた。ガラス戸が木枠に摩擦で動きづらい。ガラ、ガラと小刻みに動く。が三分の一ほど横にずれたところでうんともすんとも言わなくなった。力任せに右へ左へとずらしてみるが、これっぽちも三分の一の地点から動かない。色々が悪戦苦闘していると、後ろから、

「おじさん」

と丸みがかつた声で呼ばれた。振り返ると先ほどの少女がいる。しゃがんでちらりと見たただけであつたから全く気付かなかつたが、随分と端正な顔立ちをしている。細く、薄っすらとして、しかし、眉や鼻筋はしっかりと通つた昔ながらの美人顔といったような顔立ち。あまりに端正だつたので少し面を食らうと、

「ちよつといいですか？」

と手を伸ばしてきた。私は面を食らつたのが尾を引いて、

「ああ、はい」

と声を上ずらせながら横にどいた。

「この扉はね、一回上に少し持ち上げながらさないと動かないんだよ」

と誇らしげな口調で私に言った。すると少女は片手を扉にかけて華奢な腕を力一杯使つて、扉の上に持ち上げて横に動かした。が、先ほどより少しだけずれただけで、まだすんなりと入れるといったほどの隙間はできていない。

「あつれえ、おかしいなあ」

と言つて、今度は両手を使つてうーんと唸りながらまた力一杯扉を動かそうとする。二、三それを繰り返してみてるが全く動きもしない。それを傍から見つめていると、

「おじさん、ごめんなさい、少し手伝ってもらえませんか」

とさっきの自信満々の口調を恥じてか、おどおどとした口調で助けを求めてきた。私は少女に気付かれないように、少しだけ苦笑して、

「ああ、いいですよ」

と言って両手を扉に張り付かせた。それを見て少女は、

「いつせいの、でいいですか？」

と馬鹿みたいに丁寧に声をかける。私が頷くと「いつせいの、っせ」と彼女が声をかける。すると、扉が動いた。なんでもないことだったが、少女は笑った。満面の笑みで喜んだ。自分の為にしたことではない。私の為にしたことだ。でも彼女は喜んだ。マラソンで完走したときのような、達成感のある笑み。

少女を見て私も微笑んだ。理由などなかった。少女の無垢さが伝染したのだろう。それで自然に笑みがこぼれたのだろう。

その「自然」がうれしかった。一々何かにつけて理由を欲しがる自分に一番縁遠い感覚であった。

旅行初日(四) (後書き)

中々・・・進まないものです。

色々手を出しながらこれを書いているということも勿論あるのですが、
ようが、

ストーリー自体も進んでいない。

別に構成がどうか全く考えてもないのでこんなもんでしようが。

旅行初日（五）

十三

「ありがとう」

私は子供相手にする丁寧で、わざとらしい抑揚をつけた会釈で答えた。

「どういたしまして」

少女もこまっしやくれたような抑揚をつけて答える。店内に入ろうとすると少女も後ろからついてくる。

眺めていたあのおもちやを買うのではないのかと思いつつも、私はそこに触れることはなかった。

店内はお菓子や野菜、日用品、雑貨などが並んでいた。なるほど、こういった店かと思って眺めていると、少女は私の脇を抜けてお菓子の棚に向かっていた。そしてまた、少女は機械を見ていたときの眼光で何やら色々見つめていた。子供だから小額のお金しか持っていないのかも知れない。

私のもそういう時期があった。小銭もなくて、買うあてもないのに、品物を眺めて何時間も過ごしているような、侘しさ。

少女から目を離し、自分の飯のことを考えた。見渡すと店内の明かりはついてはいたが、点々と蛍光灯が少なめに付いているだけなので随分と薄暗い。そして肝心の店主がいなかった。

「すみませーん、どなたかいらっしやいますか」と声を張ると、

「はい」

大声を上げて、奥からドタドタと五十前後だろうが、しつかりと中年太りでエプロン姿の如何にも「田舎のオバちゃん」という姿の店主らしい人が出てきた。

「ここでご飯を食べられると伺ったのですが」

「ええ、大丈夫ですよ。何にしましょう」

「何があるんです？」

「焼き魚、煮魚、揚げ物、野菜炒め、小鉢と言った所だけど、これ見てくれたほうが早いかな」

オバちゃんは噛みそうなくらいに威勢の良い口調で一氣にまくしたてながらメニュー表を手渡してきた。

メニューに書いてあるのは普通の定食屋みたいなものだったので、少考して漁村であるしやはり魚だろう、と焼き魚定食というものを頼んでみた。

「はい、焼き魚定食だね」

オバちゃんは奥の一角にある座敷を指差して、

「お客さん、あそこで待っててもらえんかな」と言っただけでオバちゃんは奥に引込んでいった。

座敷は窓から差し込む光のせいでも、畳が火に焼けて黄ばんでいた。手持ち無沙汰で何の気なしに窓を開けると、窓の向こうには小さな木々が家を囲むように立ち、その向こうには田園があった。木々でよく見えないがトラクターの駆動音が遠くから聞こえてくる。漁村では人が休んでいたようだが、ここでは人も居るようだった。

喉かだ、秋だ、じわじわと心に静けさが沁みる。

家でも静かに暮らしてはいるが、自分が作った一人の静かさじゃない、時間の流れや、それぞれの人がある中で、それでも感じる作られた静けさが、沁みた。こういうところで晩年過ごすのも面白いのかも知れない。年寄りじみた考えも浮かんだ。

そんな想像をしながら店内を見渡すと、少女が一つのお菓子を取った。ああ、買うのかと思っていると、少女はその場でお菓子の包みを破り始めた。

吃驚して支払いはどうするのかと思っているとこちらの座敷に近づいてきて、腰を据え、パクパク食べ始めた。

思わず私は少女に聞いた。

「お金はいいのかい？」

「うん、いいの」

そう答えてまた食べる。街にあるような店じゃないから、ツケだとか何かローカルルールでもあるのだろうか、訝しがりながら見ているとオバちゃんが盆に食べ物を乗せてこちらに来た。

「お待ちどうさま」

盆に載った焼き魚定食は香ばしい匂いを漂わせて現れた。随分立派な魚である。私は魚には詳しくはないが、街中で食べるような魚とはサイズが違う。街中で食べる魚が小結と言ったところなら、この半ば寂れたような店が出てきた焼き魚は横綱と言ってもいい。とにかく大きい。それに小鉢もついて味噌汁も魚のアラであるとか、貝だとか色々具沢山に入っている。

凄いなこれとは思いながらも、お菓子の金が気になって少女を一瞥すると、オバちゃんを気にすることもなく、お菓子を食っている。オバちゃんに至っては少女を一瞥することもなく、少女を居ないかのように振舞っている。

「どうぞ、ごゆっくり」

オバちゃんはあっさりど、また店の奥に下がっていく。

どうなっているんだ、これは、と戸惑っていると少女は

「食べないんですか？」

と促してくる。それで致し方なく私は箸を手を取った。

旅行初日(五) (後書き)

あまり中身がない。

もつちよっと詰めるべきだっただろうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1111n/>

幻想旅行記

2011年1月1日15時25分発行